

回胴倒錯者

— PACHISLO FREAK —

今回の登場人物

Y班長

礼儀正しい好青年と思っていたが、その発言内容が怪しさを醸し出す。

B君

最近入社した青年。人のことが考えられる期待の新人。

店長

自分勝手なわがまま。それでもつみじころが無謀の人物。

係長

社長の付き人として当店を訪れる。ノリのいい楽しいおじさん。

社長

当グループの女社長。詳細は不明。

新鋭

これまで多くの入社面接をこなしてきた。サンダルに半そで半ズボンで来る者もいれば、スーツを着てくるものもある。履歴書も様々で、隅々まできっちり書いている者もいるが、てきとうな者も数多い。鉛筆で書いてあったり、住所と名前だけだったり、そのときとうさは千差万別だった。この2点においてもそれに対する意気込みが見えてくる。もちろん意気込みやちやんとした履歴書だけでは採用にはならず、最終的にはその者の性格や人間性が最も重要な材料となる。それを推し量るのが雑談だ。店長がいつも使

っていたこの手法、昔はただの暇つぶしにしかな見えなかったが、今はそれが良く分かる。

今回面接に来たその男は、スーツではなく私服。がっちりとした体格の若者だった。履歴書には必要最低限のことが書かれているだけで面白味は無い。緊張しているようにも見えるが落ち着いているようにも見える。履歴書を参考にいくつか質問をしてみる。しつかりとした口調で答え、迷いが無い。ただ、その口調はやんちゃぼうずの先輩に対する敬語だった。

「お前、昔は不良だった？」

「いえ、そんなことはないっす」

「あつそ、別にどっちでもいいけどさ」

この後も雑談は続き、私は採用を決めた。

「ではさつそく明日から来てもらおう、朝8時半までに来るように」

「はい！ありがとうございます！」

深々と一礼をして、その男は事務所を出て行った。それと同時に沈黙を守っていた事務員が口を開く、

「やっぱり採用するんですね、そんな気がしてました」

「なんで？」

「なんとなくです。採用の理由はなんですか？」

「なんとなくだよ(笑)。強いて言えば、彼はよく笑ったから。明日から来るので、入社関係の書類をよろしく」

厚情

「はい、わかりました」

入社したこの男はB君。向上心が強く、いい意味で私に対しても遠慮がない。お客さんからの声を私に伝え、その改善点を示す。次第に従業員もY班長よりB君を頼るようになっていた。

そしてそれが起こったのはB君が入社して数ヶ月が経過したある日の夕方だった。普段通りなら順番に引継ぎ連絡をしたあと店長に任せて休憩を頂くのだが、この日は偶然事務所まで店長と新台入れ替えについて話していた。まさにその時、なにやら廊下が騒がしい。事務所の扉を開けて覗いてみると、そこではY班長とB君が口論になっていた。その様子がただの「小さなこと」ではないと判断した私は2人をとりあえず事務所に入れ、そこで話し合うように促した。

「お前らは何で揉めてんの？」

「はい、B君が…」

Y君が何か発言しようとした瞬間、B君が横から罵声を浴びせ再び口論が勃発した。ふと店長の方を見てみると、店長もお手上げの様子。「しばらくほっとけば？」そういう目で私を見ている。タイミング悪く、インカムからフォロワーして下さいという従業員の声が。チャリと2人を見るが、口論に夢中でそれに気づいていない様子はない。

仕方なく私がその現場に向かう。機械トラブルの処理を終え、事務所に戻るとそれはまだ続いていた。B君は今にも掴みかかりそうな勢いで、ヒートアップしている。再び店長を見ると、今度は明らかに不機嫌な様子。そろそろ潮時だな…。

「ダメレ」

2人が私の声に静まりかえる。

「何が原因か知らんが店長にも分かるように落ち着いて話せ」

2人を座らせ、店長がそれぞれに話を聞いていた。その間は私がホールを勤め、ついでに他の従業員たちに事情を聞き込んでいた。それは概ね予想通り原因だった。

暫くして事務所に戻ってみると、ちょうどY君が事務所から出てくるころだった。

「主任、お世話になりました」

A氏プロフィール

三重県出身。三重の高校を卒業後、進学のため大阪へ。学業よりもパチスロに専念してしまいお決まりコースの大学中退。中退後3年間はパチスロで生計を立てる。その後サラリーマンになるも副収入はパチスロで。結婚のため三重に戻りホール店員となる。現在は知識と経験を生かし某店で設定師として手腕を振るっている。目押しレベルはスイカの種まで直視できるほどの異常っぷり。

女社長

このところの業績不振からか、めつたに来ることのない社長が来るらしい。私からしてみれば、見たことがあ

る程度で、話したことは一度も無い。今回は進んで話しかけてみようと思に決めていた。

店長も社長が来るということで朝から出勤し、やたらと機嫌が悪い。駐車場を映しているカメラの映像をじつと見つめたままだった。

「きたぞ」

「はい、お出迎えに行つてきます」

駐車場へ急いで出てくると、ちょうど車から降りたところで、社長を含め合計4人の来店だった。

「遠路ご苦勞様です、当店舗で主任を勤めさせていただいているAといいます」

「ああ、あなたがAくん？オープン時から働いてくれている子ね。この店長からいろいろ聞いていますよ、頑張ってくださいね」

「はい、ありがとうございます。事務所はこちらです」

そういつて事務所に案内した。

普段それほど多人数が入るような場所ではないのでそれほど広くも無い。私がいるときさらに狭くなるだろうと思ひ、私はホールの巡回をすることにした。

10分ほど巡回していると、店長にインカムで事務所に呼ばれた。中に入ると社長に付いてきた係長から、

「今からちよつとした会議をするからA君も参加してくれる？」

「はい、分かりました。ただ、お店も営業していますので、何かあったらホー

「え、なにに？あるならもつと早く言つてよ」

「はい、いっばいありますよ」

そう答えた私に対し、嬉しそうに聞いてくる。

◆次回予告◆

小さなことから大きなことまでしやべりまくるA氏。その提案に猛反発の店長。はたしてA氏はどんな提案をしたのだろうか？そしてその提案は社長に通じるのか？次回「改革」乞うご期待！